令和元年度　清流の国ぎふ・おすすめの１冊コンクール

紹介文部門　金賞

『アウシュヴィッツの図書係』に見る本の力　（棚橋 洋子）

［おすすめしたい本：アントニオ・Ｇ・イトゥルベ
『アウシュヴィッツの図書係』］

アウシュヴィッツと言えば、食事はおろか水すらまともに摂れない、常に死の恐怖にさらされた場所であることは広く知られています。しかし、そこに図書係とは？、本が何の役に立つのかと違和感を覚える人もいるでしょう。本を持つことは禁止されていたので、万一、看守に見つかれば処刑されてしまいます。にも拘わらず、秘かに持ち込まれ集められた本の管理を任され、果敢にやり遂げた少女は実在し、その物語は強く私の心を打ちました。

彼女に任された本は、十四才の少女の興味を引くものでもなければ愛読書でもなかったのに、その身を盾に本を隠し、傷めば修繕し実に健気に本に尽くします。そしてその日々の営みが、彼女と本との絆を強くしていき、覚悟と使命感を強くさせます。命を危険にさらすはずの本の存在は、彼女自身を支える存在となるのです。

一日を生き延びるのも過酷なアウシュヴィッツでは、想像力を持つことは困難です。しかし、本と深い絆を結んだ少女は想像力を失うことなく、飢餓の苦しみも愛する者の死の哀しみすらも凌ぐ一瞬を得ることが出来ました。これはとても貴重なことで、たとえわずかな時間でも精神の自由を得、心の平穏を得られたことが、彼女の人間性を支えたのです。そのことは明日を照らす光となり、一歩前進する勇気となります。

現代の日本社会は、アウシュヴィッツほど酷くないはずなのですが、あまりにも多くの若者が自ら命を絶ちます。大変残念でなりません。だからこそ若い人たちにこの本を読んでもらいたいと思います。人間の尊厳を脅かし、ありとあらゆる理不尽な仕打ちを受ける日々を、十四才の少女がどう生き抜くのか、読んで知ってもらいたいです。

そしてこの本の最後、著者のあとがきに本物の感動が待っています。人生を生き抜く意味と、生き抜いたからこそ知る人生の滋味を存分に味わって下さい。

令和元年度　清流の国ぎふ・おすすめの１冊コンクール

紹介文部門　銀賞

家族で楽しめる絵本　（鈴木 彩加）

［おすすめしたい本：さかざき ちはる『ペンギンのおかいもの』］

私には３歳になったばかりの息子がいる。息子が赤ちゃんの時から絵本の読みきかせをしてきたが、成長し話す言葉が増えた今の時期にピッタリな絵本を選ぶことが難しくなってきた。そんなときに、ペンギンが大好きな息子と出会ったのが『ペンギンのおかいもの』という絵本だった。

この絵本は、主人公のスイッピとその兄弟がデパートへお買い物に行き、その途中で迷子になった兄弟を探していくという内容だ。ペンギンを見つけるときに絵本では「1 ばんめのにいさんはなにをかうのかな？」と書いてあるが、まだ数字のわからない息子には「赤色のかばんをもったペンギンはどこかな？」と置き換えて読んでみた。ペンギンを見つけた時は二人で手を叩いて大喜びし、最後まで絵本の世界を味わうことができた。さらに「黄色のやかんはどこかな？」「オレンジ色でしましまのかばんをもったペンギンはどこ？」など他のものを探す問いかけをすることで、ものの名前を覚えるきっかけをつくることもできた。たくさん描かれている絵の中から指定したものを探すのは難しいかと思ったが、息子が真剣に探している姿はとても微笑ましい光景だった。

イラストも人間のように帽子を試着していたり、どのペンギンも表情が豊かで面白い。「このペンギンは何をしてるのかな？」と会話を膨らませることができ、工夫次第ではこの本一冊だけで何通りもの読み方ができる。

今までは『読みきかせ』という言葉どおり、私が絵本の文字を読んで息子に聞かせるパターンがほとんどだった。しかしこの絵本と出会ったことで、一方的に話を読みきかせるのではなく、親子で参加するタイプの絵本も素敵だと感じた。普段おもちゃで子どもと触れあっているパパやおじいちゃん、おばあちゃんにもぜひ一緒に読んでもらいたい。

令和元年度　清流の国ぎふ・おすすめの１冊コンクール

紹介文部門　銅賞

美しい字ってどんな字？　（山田 友恵）

［おすすめしたい本：伊集院 静『文字に美はありや。』］

書を習っている。まだまだ初心者だけど。真っ白な紙にお手本を見ながら、一本一本、真似をする。書き終えた字とお手本を並べてみる。なんだか微妙……どうしたら美しい字が書けるんだろうか？

何かヒントがないかと思って手にした一冊。書家ではなく、直木賞作家の著者が、“美しい字”をどう描くのか興味もあった。

本の中に登場するのは実にさまざまな文字と人。古代甲骨文字から王羲之、織田信長、夏目漱石、果ては、立川談志、ビートたけしに至る。流れる水のような字から小学生が書いたような字までさまざまな字。

たとえば、坂本竜馬の手紙。敬愛する乙女姉と恋人お竜にあてた二通の手紙。どちらも自作の絵が克明に描かれている。姉に対しては、お竜との新婚旅行（日本で最初の！）の報告、お竜に対しては部屋の間取りが、実にくわしく、もらったほうは楽しくなってくる。どうやら竜馬は相当のフェミニストらしい。竜馬が聞いたら、「おいおい、照れるぜよ」なんて言うかもしれない。姉に対しては、まるで小さな子供が「ねぇ聞いて」と言わんばかりだ。片や桂小五郎への重要な手紙は、当時の緊迫した日本の情勢の中で一気に筆を走らせた迫力のある文字が並んでいる。

美しい字を書くヒントを、などという私の当初の思いは何だかしぼんでくる。

美しい字って何だろう。喜び、悲しみ、怒り…人は字を書き続ける。誰かに想いを綴り誰かに伝え続けてきた。そこにはきっと、字の上手、下手は二の次だろう。

たくさんの文字からお気に入りの字を見つけるのも楽しい。宮本武蔵の息をのむ豪快な一行書、ビートたけしのカツラで書いた（！）字。

もしかしたら、読み終えたあと、久しぶりに筆を手にしたくなるかもしれない。誰かに手紙を書いてみたくなるかもしれない。

メールではなく、自分の字で、自分の言葉で。　ぜひ読んでみて下さい。

令和元年度　清流の国ぎふ・おすすめの１冊コンクール

紹介文部門　奨励賞

昆虫の新たな魅力　（牧村 幸）

［おすすめしたい本：内山昭一『食べられる虫ハンドブック』］

「こんな本、必要？」これを見つけた時、ゲテモノ本だと思った。
「き、気持ち悪い。でも読みたい」と、ドキドキしながら見てはいけないものを覗くような気持ちで手に取り、ページをめくってみた。しかしそこには、昆虫、いや著者の昆虫食への愛情でいっぱいだった。

採集の喜びはもちろん、茹でる、蒸す、焼く、揚げる、燻製、バターとの相性まで、様々な調理方法による美味しさへのこだわり、取り扱いの注意点が詳しく書かれている。そして香り、食感、食べるタイミング、幼虫、成虫、卵のあるなしなど、一番美味しい食べ方を研究されている。

読み進めるうちにゲテモノ本だと思っていた私の考えはガラガラと崩れ、「いやいや、これは真面目なグルメのためのレシピ本ではないですか」と思い始めた。本当に料理本コーナーに置いてもいいくらいの味への拘りだ。しかも、昆虫の小さな体には栄養たっぷり、世界の食糧不足全てをこれで賄うことはできないが、環境に優しい未来の食糧資源だという。古代からそして今でも世界、日本の地方でも食されている。

私自身は昆虫を食べたことはないが、もしも小さいころから魚や鶏、豚、牛などのように食べる習慣があったら普通に食べていただろう。東南アジアに旅行したときに、サソリのから揚げのようなものが売っていた。サソリに比べたらカミキリムシやトンボやセミなんてかわいい方じゃないかと思ったりもする。

興味本位で読み始めた昆虫食世界に、すっかり私は心を奪われてしまった。これは人類にとって非常に重要な本ではないだろうか。この本を手に、目的は違えども子供と一緒に昆虫採集に行きたいと思う。読めば読むほど昆虫への愛とよだれが止まらなくなる不思議な本だ。きっと、あなたにも。

昆虫の美味しさは、著者の記述でかなり具体的にイメージができた。ただあとひとつ、見た目を克服するということが私の課題である。

令和元年度　清流の国ぎふ・おすすめの１冊コンクール

紹介文部門　奨励賞

「むこう岸」を読んで　（岩井 淳子）

［おすすめしたい本：安田夏菜『むこう岸』］

「挫折」「落ちこぼれ」「貧困」「施し」「生活保護」「見た目で差別」…負のイメージが強い言葉が繰り返される。モノクロの色調の表紙も相まって、手に取ることを躊躇しそうになる本かもしれない。

だが、これは決してお涙頂戴の物語ではない。大人も含め、主人公と同年代の中高生へ是非ともおすすめしたい本なのである。

医師の父から言われるがままコツコツ勉強し、自分を絞り切るような努力の末やっと合格した難関校で落ちこぼれ、転校。再スタートを切るも、心底くつろげる居場所がないと思う中学三年生の山之内和真。

かたや心の病気のハハと幼い妹の世話をしつつ、生活保護を受けていることで「養ってもらっている、施しを受けている」「将来の夢だのなんだの言える身分じゃありませんよね？」と思うクラスメイトの佐野樹希。

生活環境も考え方も違う二人、ある出来事で関わりが始まり、反発を繰り返す中で「金持ちの世界と貧乏人の世界とをものさしで測ったら、不幸レベルの違いはあるのか」と、互いの苦しみを思いやるようになっていく。

和真が、樹希が、立ちはだかる不条理の打破を試みるべく、一歩一歩前に進んでいく姿には、「大丈夫だ、できるよ！」と声が出てしまった。

本を読むことは疑似体験できることだという。読んでいる中で自分だったらどうする？と問うことも度々。もがきながら、迷いながら、それでも生きていく人々、居場所がある事の大切さ、この本から教えられたものはたくさんだ。

広辞苑によれば『むこう岸』とは、川の向こう側の岸、対岸とある。物語の中の彼らは今、岸辺に立ったばかり。

読み終わってからもう一度モノクロの表紙を眺めてみた。陸橋で背を見せて立つ少年が見ているもの、それはもしかしたら夢や希望という光なのではないだろうか。

令和元年度　清流の国ぎふ・おすすめの１冊コンクール

紹介文部門　奨励賞

脳を理解すると人生は変わる　（金森 由利香）

［おすすめしたい本：黒川伊保子『共感障害「話が通じない」の正体』］

もしもあなたが新入社員で、会議の後一つ上の先輩がコーヒーカップを片付け始めたらどうしますか。このような具体的な場面を例にあげ、脳科学から見えてくるものを次第に解き明かしていくのは、興味深いことです。

周囲から、「話聞いている？」とよく言われる人。当たり前のことをどうしてできないのかと言われ「そんなこと誰も教えてくれなかった」と答えてしまう人。この人、話が通じないなと感じることはありませんか。私たちの周りには実に様々な人がいます。でもそれは単なる個性だと片付けてしまいます。驚いたことに、これは心ではなく脳の問題だったというのです。

著者は、お菓子をすすめられても一度は遠慮する人や三回すすめられないと食べない人がいたといった自らの体験から、脳の定番の違いを発見します。きっと、男女差や地域差などによるちょっとした見識の違いなら経験があるのでは？　愚痴や悩みを真剣に話す女性と、やはり真剣に聞いて相手の話を遮って問題解決のアドバイスをする男性。どちらも真剣なのに腹が立つという経験をしたことはありませんか。これも脳の定番が違うからだと説明されると、納得できそうな気がします。

こうした脳の認識のギャップの他、自閉症傾向やＡＤＨＤ傾向の脳の特徴にも触れています。さらにそれだけでは説明がつかない共感障害、人の所作が自分の所作に置き換えられないという認識傾向をもつ脳、について具体的な状況をあげながら説いていきます。

生まれた時が最多の脳神経細胞ニューロンがいかに減っていくか、ミラーニューロン効果について、など脳細胞レベルの話も、どういう状態なのかとてもわかりやすく説明されています。そして、共感障害の正体や共感障害者を導く方法とは何なのでしょうか。

一人一人が、それぞれ違う脳の人たちを理解し、誰もが生きやすい世の中だと思えるために、必読すべき一冊です。

令和元年度　清流の国ぎふ・おすすめの１冊コンクール

紹介文部門　奨励賞

見えない優しさ　（澤津 舞）

［おすすめしたい本：重松清『せんせい。』］

先生と生徒の関係を描いた短編集はこの世にごまんと存在する。しかし、この本は特別だ。なぜなら登場する先生らがみな不完全だからだ。さえなかったり、変わり者だったり、弱い心を持っていたり……そんな先生らしくない先生ばかりが登場する。だからといって嫌な先生は一人としていない。むしろ、完璧な先生が登場する作品より「先生っていいなあ」と素直に感じられるだろう。

この本の中で私が一番好きな話は「ドロップスは神様の涙」だ。クラスでいじめられている河村さんの保健室で過ごす日々を描いた物語である。河村さんが通う保健室の養護教諭であるヒデおばはぶっきらぼうで人気がない。だから河村さんも始めはヒデおばのことがあまり好きではなかった。しかし、河村さんは、ヒデおばが陰ながら自分をいじめがある教室から守ってくれていることを知り、ヒデおばの優しさに気づいていくと共に成長していく。

人は見返りを求めてしまう生き物だと思う。誰かに優しくしたら、その分優しくしてほしい、好感を持ってほしいと思っても何等不思議なことではない。しかし、ヒデおばにはそのような考えが全くない。ぶっきらぼうでとっつきにくいのはヒデおばの短所であると共に長所でもあるのだろう。誰にも気づかれなくても優しさを振りまける人間なのだ。私の周囲にもそういう人が沢山いる。陰ながらの優しさに気づく度、そんな優しさを当たり前と思わない人でいたい、そんな優しさを振りまける人になりたいと思う。

この本の中では、多種多様な先生らが懸命に生きている。彼らのその生き様から、貴方はきっと勉強よりも大切な何かを学ぶことができるだろう。

令和元年度　清流の国ぎふ・おすすめの１冊コンクール

紹介文部門　奨励賞

寄り添い語りかけてくれる１冊　（上妻 正子）

［おすすめしたい本：長田弘『詩ふたつ』］

「春の日、あなたに会いにゆく。あなたは、なくなった人である。どこにもいない人である。」

冒頭の言葉を初めて読んだ時、胸が締めつけられる思いがした。そう、私の大切な人はもういないのだ。頭では理解しながらも心では受け入れられない事実。押さえつけていた感情が溢れ出す。

詩人・長田弘は亡くなった人の言葉を続ける。「どこにもゆかないのだ。いつも、ここにいる。」この言葉に、悲しみの中にも温かいものが沸き上がるのを感じる。

最愛の母が闘病の末亡くなった後、気持ちが落ち着いたら読んでみて、と友人がこの詩集を送ってくれた。大切な人の死、自らの生と向き合うふたつの詩は、私に静かに語りかけてくれる。

詩の隣に寄り添う、画家グスタフ・クリムトの描く瑞々しい樹木と花々がまた心を打つ。

バラの絵を見て思い出す。母が大切に育てていたバラ。母亡き後、父が黙々と世話を続けた。その父も亡くなり、バラは今私のもとで生きている。

そうだ、二人とも、姿は見えないが、ここにいるのだ。私の中で、バラの傍らで生きているのだ。

著者は人生についてこう綴る。「何一つ、余分なものがない。むだなものがない。」と。

時が経ってもなお、別れが悲しく愛しい人達がいる。見守ってくれる温かい友人がいる。私の中にあるかけがえのない絆。この詩集は私にそっと寄り添い、大切なことを教えてくれるのだ。

いずれまた、誰かを見送る時があるだろう。その度に、私はこの詩集を開き、悲しみにまっすぐ向き合い、確かな絆と温かい思い出に包まれるだろう。